



日本産シッポウフグ属魚類の分類学的再検討

○園山貴之 (下関市立しものせき水族館)

E-mail: lubricogobius@gmail.com

はじめに

シッポウフグ属 Genus *Torquigener* Whitley, 1930は、体は小棘に覆われること、下顎の輪郭は側面から見て角張っていること、鼻孔が2つあること、体側に2本の側線があること、体の腹側縁に1皮褶があること、体側に銀白色の縦帯を持たないこと他のフグ科魚類と区別できる。
日本沿岸では、基本的にアマミホシゾラフグ *T. albomaculosus*、シッポウフグ *T. brevipinnis*、およびナミダフグ *T. hypselogeneion*の3種が分布するとされているが、Hardy(1989)、Mundy(2005)およびRandall (2007) では *T. florealis*も日本に分布するとしている。本研究で日本国内のシッポウフグ属魚類の標本調査を実施したところ、シッポウフグとされていた標本は、2種 (sp. A, sp. B) を混同していることがわかり、sp. Aを *T. florealis* (Cope, 1871)、sp. Bを *T. brevipinnis* (Regan, 1903)と同定できた。また日本沿岸のシッポウフグ属の分布と、シッポウフグの標準和名について検討した。

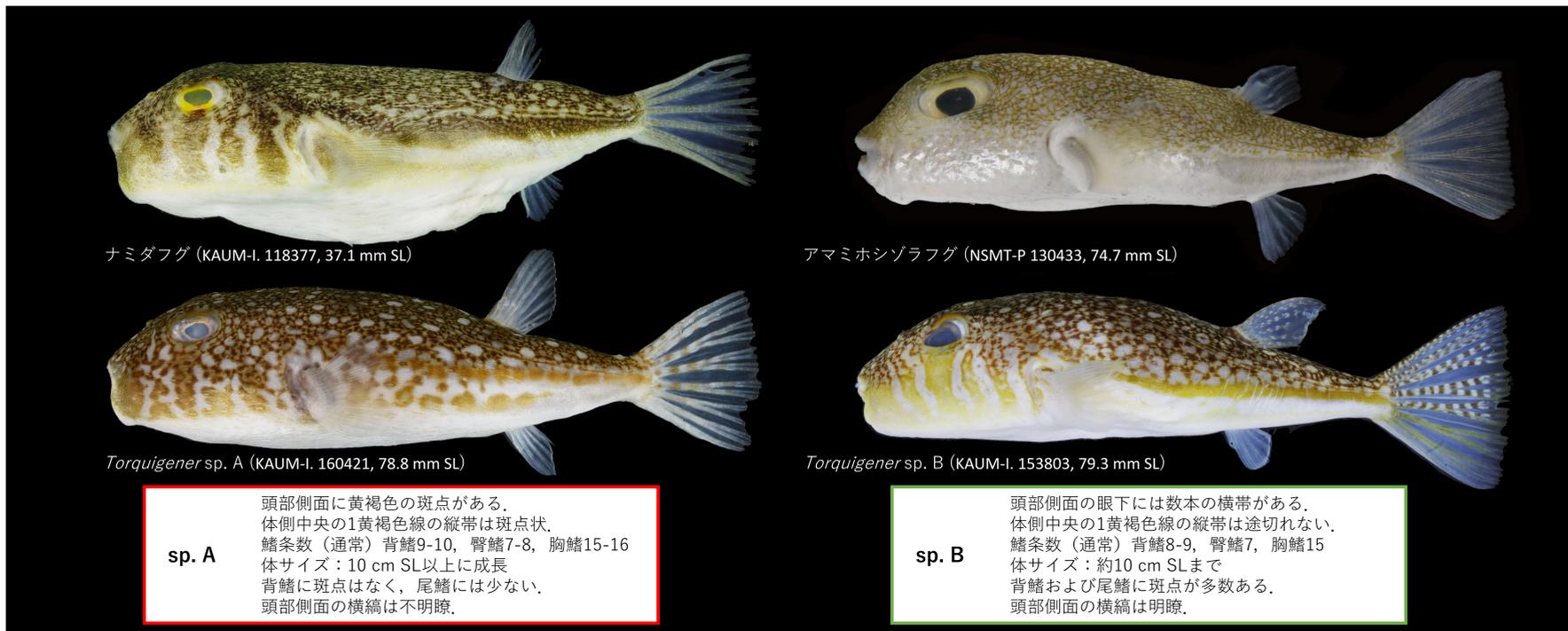
松浦 (2017) : 日本産シッポウフグ属の種の検索

- 1a. 頭部側面に褐色または黄褐色の垂直な帯が通常4-5本ある 2
- 1b. 頭部側面には褐色または黄褐色の垂直な帯はない アマミホシゾラフグ
- 2a. 頭部側面には黄褐色の垂直な帯が5本ある、体側中央を1黄褐色線が鰓孔直後から尾端基部まで縦走 シッポウフグ
- 2b. 頭部側面には褐色の垂直な帯が通常4本ある、体側中央を1褐色線が鰓孔の前背方から尾端基部まで縦走する、褐色線は胸鰭後方から前方に向かって緩やかに上昇し、目と同じ高さまで達し、鰓孔の前背方で終わる。 ナミダフグ

材料

標本調査
高知大学 (BSKU)
国立科学博物館 (HMNH-P)
鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM-I)
大阪市立自然史博物館 (OMNH-P)
三重大学 (FRLM)
+ 既往文献

結果



sp. A

頭部側面に黄褐色の斑点がある。
体側中央の1黄褐色線の縦帯は斑点状。
鰭条数 (通常) 背鰭9-10、臀鰭7-8、胸鰭15-16
体サイズ: 10 cm SL以上に成長
背鰭に斑点はなく、尾鰭には少ない。
頭部側面の横縞は不明瞭。

sp. B

頭部側面の眼下には数本の横帯がある。
体側中央の1黄褐色線の縦帯は途切れしない。
鰭条数 (通常) 背鰭8-9、臀鰭7、胸鰭15
体サイズ: 約10 cm SLまで
背鰭および尾鰭に斑点が多数ある。
頭部側面の横縞は明瞭。

Fig. 1. 日本産シッポウフグ属

Table 1. 背鰭, 臀鰭, 胸鰭の鰭条数 胸鰭条数は最前部の軟条も数えた。

		dorsal fin rays			anal fin rays		pectoral fin rays		
		8	9	10	7	8	14	15	16
sp. A	n=36	6	18	12	11	25	5	15	16
sp. B	n=44	30	14		38	6	9	32	3

同定: Hardy, 1989などの *T. florealis* および *T. brevipinnis*と一致した。

- ・鰓孔の上端は眼の下縁より下方。
- ・頬に小さな黄褐色点がある。
- ・頬に棘がある。
- ・背鰭条数9-11、臀鰭条数8-9、
- ・胸鰭後縁から尾端基部まで一連の明瞭な斑点がある。 など



sp. A = *Torquigener florealis* (Cope, 1871)

- ・背面に棘がある。
- ・頬に4本の太い帯がある。
- ・眼径は頭長の4.1倍以下
本研究3.0-5.8倍 (平均3.7) など



sp. B = *Torquigener brevipinnis* (Regan, 1903)

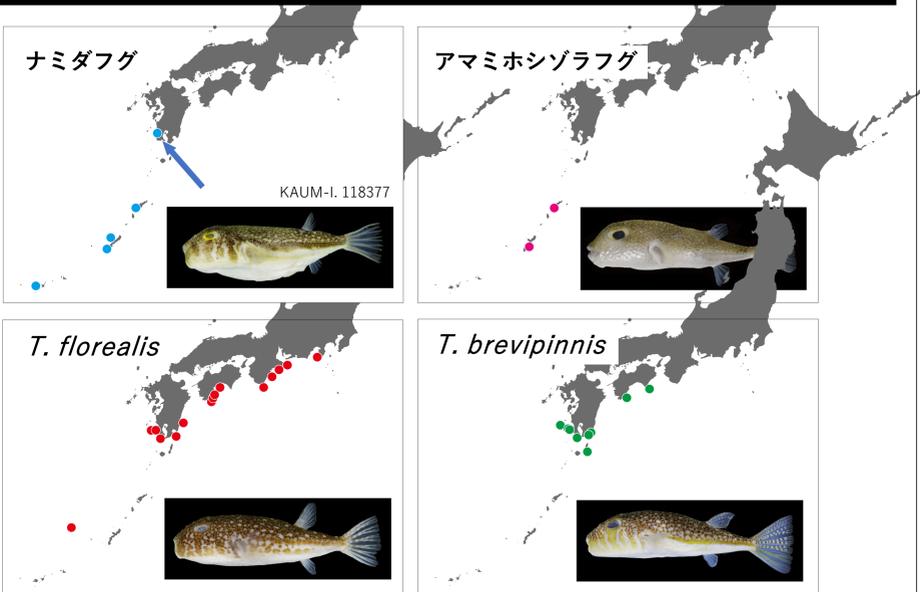


Fig. 2. 日本沿岸海域のシッポウフグ属の分布

ナミダフグの分布

原口 (2007) によりKAUM-I. 162, 614, 1533の3個体の標本に基づき鹿児島県笠沙を本種の分布の北限記録として報告したが、小枝ほか (2018, 2020) および岩坪ほか (2022) では、シッポウフグ *T. brevipinnis*の誤同定とした。本調査でも、3標本はいずれもナミダフグではなく、再同定の結果、KAUM-I. 164, 1533は *T. florealis*、KAUM-I. 162は *T. brevipinnis*に同定した。本調査で確認できたナミダフグの北限は、KAUM-I. 118377の鹿児島県日置市東市伊作田吹上浜江口漁港であった。

考察①

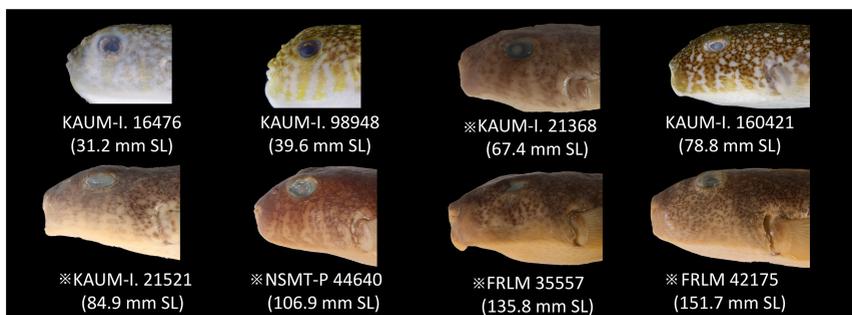


Fig. 3. 頭部側面の体色の变化

Matsura & Motomura (2022)では *T. florealis*の頭部側面に横帯があるという記載はないが、*T. brevipinnis*の頭部側面には帯があるとしている。本研究で *T. florealis*と同定した標本のうち、135.8 mm SL以上の個体は頬の横帯は見られない (もしくは曖昧) だが、少なくとも106.9 mm SL以下の個体では、横帯ととれる体色の個体を認めた。
※はアルコール浸漬標本画像

➡ 頭部側面の体色を同定ポイントにすると混乱を招く恐れがある

本研究を基にした

日本産シッポウフグ属の検索

- 1a. 体側に縦帯はない。 アマミホシゾラフグ
- 1b. 体側に縦帯は線状もしくは点状。 2
- 2a. 体側に縦帯は褐色で、鰓孔背方からはじまる。 ナミダフグ
- 2b. 体側に縦帯は黄褐色で、鰓孔直後からはじまる。 3
- 3a. 体側に縦帯は斑点状。背鰭に白色斑点はない、頭部側面の横帯は約100mm SL以下の個体では確認できるか、あっても不明瞭。背鰭条数は通常9-10、臀鰭は通常8。 *T. florealis*
- 3a. 体側に縦帯は直線。背鰭に白色斑点がある。頭部側面の横縞は明瞭。背鰭条数は通常8、臀鰭は通常7。 *T. brevipinnis*

謝辞: 本村浩之氏 (鹿児島大学総合研究博物館), 古橋龍星氏 (鹿児島大学大学院農林水産学研究所), 伊東正英氏 (鹿児島県南さつま市笠沙町漁業協同組合), 遠藤広光氏 (高知大学), 木村清志氏, 淀 大我氏 (三重大学), 中江雅典氏 (国立科学博物館), 松井彰子氏 (大阪市立自然史博物館), 下関市立しものせき水族館魚類展示課の皆様。

考察②

T. florealis or *T. brevipinnis* どちらが標準和名「シッポウフグ」?

- ・富山ほか (1958) などは *T. brevipinnis*の学名を当てたものに対し、標準和名シッポウフグを使用していたが、*T. florealis*の誤同定であった。
- ・これまで *T. florealis*の学名に対しシッポウフグという和名を当てた文献はない。
- ・記載文は両種を混同している。



*T. florealis*と再同定 富山ほか (1958) より

文献で使用された画像 (スケッチ) :

- T. florealis*: 富山ほか (1958), 松浦 (1997), 御所 (2001), 山田 (1993, 2000), 吉野 (2008), 山田・柳下 (2013), 一般社団法人山口県食品衛生協会 (2016), 中坊 (2018) など
- T. brevipinnis*: 松浦 (1984, 2017), 岩坪・本村 (2017), 公益財団法人鹿児島市水族館公社 (2018), 小枝ほか (2018, 2020), Koeda et al. (2019), 村瀬ほか (2021), 岩坪ほか (2022) など



T. brevipinnis 松浦 (1984) より



*T. florealis*と再同定 一般社団法人山口県食品衛生協会 (2016) より

しかし,

一般社団法人山口県食品衛生協会 (2016) などフグを食品として扱うものは、これまで *T. florealis*と同定できる画像を用いて、標準和名シッポウフグを使用している。標準和名シッポウフグは食用不可とされているとはいえ、*T. brevipinnis*に対して標準和名シッポウフグを用い、*T. florealis*に新称を用いることは、フグを食品として扱う場合に混乱を与えることが予想される。

*T. florealis*に対して標準和名シッポウフグを使用するのが妥当か

引用: 富山ほか (1958) 原色動物大図鑑, 松浦 (1997) 山溪カラー名鑑 日本の海水魚, 御所 (2001) 以布利 黒潮の魚, 山田 (1993) 日本産魚類検索 初版, (2000) 日本産魚類検索 第二版, 吉野 (2008) 山溪ハンディ図鑑13 日本の海水魚, 山田・柳下 (2013) 日本産魚類検索 第三版, 一般社団法人山口県食品衛生協会 (2016) ふく一正しい知識の普及啓発と “ふく中毒防止”のために, 中坊 (2018) 小学館の図鑑Z 日本魚類館, 松浦 (1984) 日本産魚類大図鑑, (2017) 日本産フグ類図鑑, 岩坪・本村 (2017) 火山を望む鹿海 鹿児島湾の魚類, 公益財団法人鹿児島市水族館公社 (2018) かごしま水族館が確認した鹿児島島の定置網の魚たち, 小枝ほか (2018) 黒潮のあたる鹿児島湾内之浦漁港に水揚げされる魚たち, (2020) 大隅市場魚類図鑑, Koeda et al. (2019) Fishes of southern Taiwan, 村瀬ほか (2021) 新・門川の魚図鑑 ひむかの海魚たち, 岩坪ほか (2022) 薩摩半島沿岸の魚類。